

被災地の子どもたち支援と異文化理解をつなぐ教育プログラム開発

Development of Educational Programs to Link Support for Children in Disaster Areas with Cross-cultural Understanding

荒井 芳廣¹, 金田 卓也², 干川 剛史¹, 伊藤 恵里子³, 谷川 夏実⁴

¹人間関係学部人間関係学科, ²家政学部児童学科,

³千葉明德短期大学, ⁴家政学研究科人間生活専攻

キーワード：被災地，支援，表現，異文化，ハイチ

1. 研究の目的

東日本大震災において、発展途上国からのものも含めて世界各国から援助の申し出が相次いだことは、経済活動のグローバル化とともに異なる国家間の相互依存度がますます高まってきていることを示している。そうした状況の中で、異なる文化を理解し、文化交流を促進していくことは、それぞれの国益にもなり、世界の政治的安定につながることはいうまでもない。ラテンアメリカの地域研究を専門とする研究代表者は、これまで異文化理解教育の必要性を痛感し、大学の授業においてもラテンアメリカ社会の文化紹介に力を注いできたが、フィールドとするハイチが2010年1月に発生した地震により30万人以上の死者を出す大惨事に至ったことをきっかけに、復興支援活動と異文化理解とを結びつけたいと考えていた。地震直後の物資運搬のような緊急援助とともに、復興という長い道程において、被災地の子どもたちに対して長期的視点に立ったさまざまな教育的支援のための文化活動が必要とされる。

被災地の子どもたち向けの教育的文化プログラムを開発し、その成果を非被災地にフィードバックし、被災地理解という視点から異文化理解のプログラムとして再構成するというのが本研究プロジェクトのねらいである。

2. 活動実施報告

平成23年8月19日～8月20日に、被災地である宮城県石巻市の飯野川中学校で行われた教育行事に参加し、子どもたちへの教育支援の可能性を探った。流された和太鼓を復活させるなど、表現と結びついた文化的活動が地域の絆を強める上で重要な役割を果たしていることが明らかになった。

8月25日～8月29日にハイチを訪れ、大地震よ

り1年半以上経過した現在の社会的状況を調査し、小学生を中心にしたキッズゲルニカ・ワークショップを実施した。キャンパスの画面半分に生命のシンボルとしての樹木を描いた。11月5日～6日に、震災で壊滅的被害を受けた宮城県名取市の沿岸部にある閑上地区の人たちの暮らす箱塚桜仮設住宅を訪れ、そこで生活する子どもたちと、ハイチで画面の半分が描かれたキャンパスを用いてキッズゲルニカ・ワークショップを実施した。絵を描き始める前に、ハイチという国が大きな地震の被害に遭ったことを説明した。ほとんどの子どもたちがハイチという国についてよく知らなかったが、同じく大きな地震を受けた地域として強い関心を示した。

東日本大震災の被災地における子どもを取り巻く生活状況について調査を行うために、干川は、気仙沼市社会福祉協議会ボランティアセンター本吉支所での仮設住宅支援活動及び南三陸町内で開催された「復興（復興）市」において、参与観察による実態調査を平成24年2月23日～2月26日に実施した。調査の結果、気仙沼市本吉地区の仮設住宅では、部屋数の少ない狭く断熱も十分でない空間に、子どもを含めた多人数の家族が、居住している実態が明らかになった。また、南三陸町復興市では、イベントでExileなどの芸能人が訪れ、子どもたちと交流し、子どもたちは、大雪の降る寒冷な天候にもかかわらず、多数の店舗で買い物を楽しみながら、楽しいひと時を過ごしていた。

さらに「現代社会論セミナー」、「社会学セミナー」の授業内で、異文化理解教育および開発教育のための教材づくりの試みとして、「ハイチ諺かるた」を学生に作成させた。この作業を通じて明らかになった異文化理解における様々な問題点については現在分析中である。



写真 1 南三陸町福興市での仮設商店街オープニングイベントで子どもたちと交流する EXILE のメンバー

3. 研究目標の達成状況

ハイチと震災被災地でキッズゲルニカを実施するという当初の目的は達成することができた。



写真 2 ハイチでのキッズゲルニカ・ワークショップ



写真 3 名取市でのキッズゲルニカ・ワークショップ



写真 4 「ロバが働くおかげで、馬は自分をレースで飾ることができる」(Bourik swe pou chwal dekore ak dentel)



写真 5 「借り物の太鼓では決して上手く踊れない」(Tanbou prete pa janm fè bon dans)

4. まとめと今後の課題

今後も、東日本大震災の被災地で毎月、気仙沼市本吉地区の仮設住宅及び南三陸町福興市での参与観察調査を行い、被災地の子どもを取り巻く生活状況の把握をさらに進めて行く。11月に行った名取市でのキッズゲルニカは完成することができなかったが、冬の間は寒いので暖くなる来年の5月位に仕上げたいということになった。

5. 研究成果

1) 著書、学術雑誌

<単行本掲載論文>

[1]荒井芳廣, 「地震後のハイチ人国外移住者の役割」, 京都大学地域研究統合情報センター編『地域から読む現代—グローバル化のなかの人々と社会』, 晃洋書房, 2012年3月, pp.147-151.

<雑誌>

[1]干川剛史, 大規模災害における情報支援活動の展開と課題, 大妻女子大学人間関係学部紀要 人間関係学研究, 13号, 25-49.

2) 学会発表

[1]干川剛史, 大規模災害における情報支援活動の展開, 日本社会学会第84回大会ポスターセッション, 関西大学, 2011年9月18日.

[2]干川剛史, 地域再生デジタル・ネットワークとしての「灰干しプロジェクト」の展開, 社会貢献学会第2回大会ポスターセッション, 神戸学院大学ポートアイランドキャンパス, 2011年12月10日.